新潟の農家が滅んでも俺たちは残る

山下惣一

提起

やました・そういち
佐賀県農民作家。昭和11年生まれ。水田1.2ha、ミカン1.5ha、野菜80aを営農。そのかたわら文筆活動を続け「ひこばえの歌」「減反神社」など多くの著書がある。

私はなるべく多くの人が農業にかかわって生きられる農業を目指している。足元から考えようと、八年前に営農推進協議会を作った。米はコストを下げるのが難しい。暖かい所だから早く植えて早く売ることはできるので、四月五日に田植え、八月五日に稲刈り、盆前には全部売ることにすると、当分大丈夫だ。新潟の米がうまいといっても、そうはできない。俺たちは生き残れる。八月から田んぼが空くので、とにかくいろいろ作る。作った野菜の直売所を作り、売り上げは全部積み立ててヨーロッパの農家にホームステイすることを決めている。なるべくみんなでやろうと頑張っている。

予想では、あと五年から八年ぐらいの間に、部分自由化を含めた米の自由化と、内部崩壊が一緒に来るだろう。現在、農業をやっている者の一番の弱さは、仕方なくやっているというのが非常に多い。後継者はいない、年を取る、借金もある。だから土地を売る。その結果、環境が破壊される。被害を受けるのは農家だけではなく、そこに住んでいる人全部だ。非農家が農業を守れという運動を起こしている例が多く出ている。これは百姓と生活者の共通の土俵ができてきたということだ。

自由化は突き詰めると、企業など、外の資本が農業に参入することだ。牛肉に例を取れば、日本へ牛肉を入れるのは商社だ。畜産農家は商社と競争することになる。そこに気付いてほしい。米の自由化をきっかけに、企業が米作りに入ってくる。やる人がいなくなればそうせざるを得ない。農地法の規制緩和という方向にも動いていくのではないか。これは非常にまずい。住む人と農業をやる人は同じでなければならない。企業農業では環境は守らない。もうからなくなったら次へ移るということになるから、そういう農業は許すべきではない。兼業でもじいちゃん、ばあちゃんでも、何農業でもいいから、なるべく多くの人が農業にかかわり、そこに住み、そのことによって地域社会が成り立つという農業を我々は目指すべきだと思う。そういう農業をそこに住む消費者も、生活者として支持すべきだ。

「好きもの集団」元気印で立ち向かえ

小松光一

提起

こまつ・こういち
法政大学講師。昭和18年北海道生まれ。著書に「私の青年団改造論」「若きドンファーマへのメッセージ」「宇宙の創り方教えます」などがある。

僕はフセインの味方だ。なぜフセインがたたかれているか。それはわがままだからだ。悪者に徹している姿は小気味いい。今度の湾岸危機は先進国型サミットシステムが崩壊しつつあるから起きた。僕はこれをフセインシンドロームと言う。先進国を中心とした国際秩序は大きく分裂していく。日本の社会もそうだ。商品原理で組み立てられているシステムと、生活原理で組み立てられているシステムがあるが、この二つが次第に分裂し始めている。

われわれは生活原理に立ってものを考え、それをフセインのようにわがままに押し通していくしかない。山下さんが言ったように、日本農業が滅んでも、俺の農業は残る。これは生活原理だ。残るような戦略を考える。新潟の百姓が滅んでも佐賀の百姓は残る。このフセインシンドロームが大事だ。自分たちの地域を作っていくときにそういうパワーが必要だ。商品原理という経済的な合理性で地域を作る流れに対し、われわれは生活原理をベースにした地域社会のシステムを独自に作らなければならない。だが、これはフセインのようにたたかれるかもしれない。わがままだから。

本市農家の代表として関根喜八郎さん（九州）が参加。規模拡大に伴う実情や将来への不安など、率直な感想を述べました。

生活原理は二つある。一つは、働くことと遊ぶことが一緒になったような暮らし方。場合によっては最初から遊ぶ。日本の百姓は、働くだけだった。二つ目は自分たちの地域を、命が生き生きと循環する地域にする。それがこれからの地域づくりだ。そのためには、それができる人間が育たなければならない。本気になって地域を動かしていく人間が育たなければならない。その意味でこの白根市に「好きもの集団」が結成される必要がある。フセインのような好きもの集団が白根を資源にしながら、おもしろいことをやってしまう。それを見た人が、農業はおもしろいと言ってしまう。百人の一歩なんてだめだ。一人の百歩が渦巻きを起こすような、元気印の少数派がタケノコのように出てくる。そういう白根のまちづくりが起きてくるとおもしろい。農村の側が地域づくりをやろうとするならば、都会に迎合することなく、都会の人を食ってしまうようなパワーを持った地域をつくり出していくことだ。

嫁が来るから母屋を出ろ!? あなたはどうする

小沢禎一郎

提起

おざわ・ていいちろう
長野県農家。昭和15年生まれ。乳牛など85頭を飼育。30組の仲人体験の中から、これからの村づくり、家庭づくりを見いだそうとしている。

私は家で採れたものだけで子供を育てようというつもりでやってきた。しかし農家の人は自分の家で作ったものを食べない。例えば私らの酪農の仲間は牛乳を飲まない。先ごろ東京の娘さんが、黒牛の肉が食べたくて、黒牛農家にお嫁に来た。出荷されるとき、お嫁さんは実家へも送りたい、家でも食べたいと言ったら、あれは売るもので、食べるものではないと言われた。で、赤ちゃんとだんなを連れて家を出た。娘さんたちは農家へお嫁に来る場合食べたくて来る。今求められるのは農家の自給自足ではないか。食生活の内需拡大をしてほしい。それは後継者を育てる意味でも大事である。

農家の子供の仕事がなくなり、生きること、自立することを学ばせる機会がなくなった。知識はあるが、知恵のない農村青年が育っている。そういう後継者の難問は結婚だが、その後の難問がまだある。それは何か。一つは農家ではなぜ給料をくれないか。二つ目はなぜ農家ではお年寄りと一緒に住むのか。三つ目はなぜ農家では週休二日制がないか。農家生活の根底は江戸時代のままだ。そこに都会から嫁さんが来る。農家生活を変えなければならない。

なぜ農家では給料をくれないか。青色申告をすればいい。給料を取っていた娘さんを迎えるわけだから、給料を払う。その中から生活費、食費を徴収して生活する。生活の自由裁量権をお嫁さんに任せれば欲も出る。お嫁さんは出ていかない。

なぜお年寄りと住むか。一緒に住むなら親子の養子縁組をしてほしい。養子縁組をしないと、親を見る義務は子供だけで、お嫁さんとは赤の他人だから扶養の義務がない。そこで初めて財産権、相続権が発生する。さらに、できたら子供が成人する前に、自分たちの隠居部屋を作るべきだ。ふろと台所と便所も作る。親が母屋を出ていかないために農村社会はますます高齢化する。親たちが隠居していれば若夫婦は村の精鋭として活躍する。このことが解決すると週休二日制などというのは、お嫁さんが欲を出すから関係ない。

次の問題は老後。私共の農協では、農協独自に特別養護老人ホームを年内に作る。今後私たちはお嫁さん対策以前に自分の老後をどうするか対策を立てなければならない。息子に見てもらう。貯金する。年金をかける。そういうことを考えなければならないところにきたと思う。

男と女の結婚観は決定的に違う

板本洋子

提起

いたもと・ようこ
日本青年館・結婚相談所長。昭和23年茨城県生まれ。結婚難対策に出会いの場づくりのイベントなどを企画運営。銀座のトラクター嫁来いデモの仕掛け人。

今まで農村の結婚対策というと、行政や農業団体が集団見合いのようなことをやってきた。最近は青年たちが自分たちで交流会をするようになった。しかし、まだ自分たちが女性とどうかかわっていくのか、よく分かっていないようだ。

まず、結婚観が男と女では大きく違う。女性は自分のものとして結婚を考えているのに対して男性は社会的信用や世間体として考え、そのことにプレッシャーさえ感じている。戦前の家制度のときから、嫁はもらってくるものだった。その後は経済力のない女性が、男性に依存して生きるという形態の中で、嫁は来た。男は金をどれだけ稼ぐかという経済的な価値だけで育てられてきた。

しかし一方、女性はどんどん変わってきた。その理由の一つに女性の怨念返しがある。つまり、自分が結婚生活に幸せだと思わなかった部分を、娘を通してつけを返す。例えば姑に仕えてきて苦しかったから、娘には同じ思いをさせたくない。何とか自由にさせてやりたいという、男とは絶対的な育ち方の違いがある。さらに現在、物質的にも経済的にも恵まれた社会の中で、生きるための結婚ではなく、自分にとっていい結婚をしたいと考える女性が多い。男と女の関係が今の時代になって問われ始めたときに、残念ながら良い見本がない。今、女性はその男の人に本当に魅力を感じないと結婚しない。しかし、男の方はその魅力というものが何なのか、よく分かっていない。

これからは、どうしたら楽に生きられるかという男と女の関係を考えるような時代を作らなければいけない。同居、家柄、世間体などの中で、窮屈な思いを自分たちがしていながら、お嫁に来いというのは難しい。もっといろいろなバラエティーに富んだ生き方ができる農村を目指したら良いと思う。女性を嫁として見るのではなく、後々、彼女たちが農協の組合長や農業委員会の会長として活躍できるような道も含め、やれる女はやらせる。豊かな生き方がアピールできるような村づくりをしていけば、都会で窮屈な生き方をしている女性たちも、農業に希望を持ってお嫁に来れるようなチャンスがあると思う。女だからと、ものも言えなかった女性の位置付けを考え直してほしい。